

行動観察による社会能力評価「かかわり指標(成人用)実践版」の臨床的妥当性に関する研究

トクタケ ケン タロウ シノハラ リョウジ スギサワ ユ カ タナカ エミ コ
 徳竹 健太郎*1 篠原 亮次*3 杉澤 悠圭*4 田中 笑子*5
 トミサキ エツ コ ワタナベ タ エ コ モチヅキ ユ キ コ ウ バイリョウ
 富崎 悦子*1*6 渡辺 多恵子*7 望月 由妃子*1 呉 柏良*1
 ナン バ マ ユ ミ アン メ トキエ
 難波 麻由美*8 安梅 勅江*2

目的 本研究は、成人の典型的なかかわり場面における行動観察評価と臨床評定の関連から、行動観察による社会能力評価「かかわり指標(成人用)IRSA: Interaction Rating Scale Advanced 実践版」の臨床的妥当性を検討することを目的とする。

方法 18歳以上の男女43名を対象に、日常的なかかわり場面を再現した2名1組の課題を実施した。研究者によるIRSA実践版を用いた行動観察評価と、臨床専門職による臨床評定を得点化し、関連を検討した。行動観察評価および臨床評定による「協調」「自己制御」「自己表現」の各領域得点と総合得点について、Spearmanの相関係数を算出した。

結果 行動観察評価と臨床評定の間には「協調」($r = 0.62$)「自己制御」($r = 0.61$)「自己表現」($r = 0.59$)「総合」($r = 0.72$)すべての項目に有意($p < 0.001$)な正の関連がみられた。

考察 行動観察評価得点と臨床評定得点に相関がみられ、IRSA実践版の臨床的妥当性が示された。社会能力の特徴を簡便に測定できる「IRSA実践版」を実践の場で活用することにより、社会能力の向上、発揮に困難のある成人に対する支援への一助につながる可能性がある。

キーワード 社会能力、かかわり、評価、指標

I 緒 言

少子高齢化、核家族化の進行にともない、世代間における関係性の欠如、地縁関係の希薄化など社会における対人関係を築くことの難しさや、地域におけるかかわりの減少が指摘されている。内閣府が実施したアンケート調査では、人間関係が難しくなったと感じる者が6割を超え、その要因として「地域のつながりの希薄化」「人間関係を作る力の低下」を挙げる割合が高いとする結果が報告されている¹⁾。このことから人間関係を築く能力、すなわち社会能力

の向上や発揮への支援が求められているといえる。

社会能力とは、社会性や社会的適応性をとらえる概念である。社会性を広義にとらえると、その社会が支持する生活習慣、価値規範、行動基準に沿った行動がとれるという全体的な社会適応性を指すとされている²⁾。社会能力の類義語に社会的スキルがあり、対人関係を円滑に進める具体的な行動³⁾、他者との関係や相互作用のために使われる技能⁴⁾と定義されている。そこで本研究では社会能力を、社会的スキルを包括し、一定の価値観に基づいて総合的に評価さ

*1 筑波大学大学院人間総合科学研究科院生 *2 筑波大学医学医療系教授
 *3 山梨大学医学工学総合研究部講師 *4 牛久市健康管理課 *5 日本学術振興会特別研究員
 *6 上智大学総合人間科学部看護学科助教 *7 日本保健医療大学保健医療学部看護学科准教授
 *8 青森市民病院

れる能力と定義する。

社会能力の概念は研究者により表現が異なるが、いくつかの要素で構成されている。社会能力に関する研究はライフステージを通して概観した場合、乳幼児期を対象にしたものが多く、乳幼児期の社会能力を構成する概念としてGreshamら⁵⁾はcooperation, self-control, assertionの3次元を、Caldarellaら⁶⁾はpeer relations, compliance, self-management, assertion, academicの5次元を、Elkskinら⁷⁾はinterpersonal, peer-pleasing, teacher-pleasing, self-related, assertiveness, communicationの6次元を、Kolbら⁸⁾はpeer & group interaction, problem solving/decision making, self management, communication, assertionの5次元をあげており、「協調 (cooperation)」「自己抑制 (self-control)」「自己表現 (assertion)」が共通して記述されていることから社会性を構成する要素をこの3次元に集約できると考えられる。この3次元構造は、日本における乳幼児の大規模コホート研究においても再現性が確認されている⁹⁾。

一方、成人の社会能力を構成する概念として相川⁴⁾は「記号化 (相手に自らの意思を伝える)」「解読 (相手の意思を理解する)」「感情統制 (自ら生じる感情に対処する)」の3次元を、Riggio¹⁰⁾はExpressivity, Sensitivity, Controlの3次元をあげており、乳幼児期と同様に「協調 (cooperation)」「自己抑制 (self-control)」「自己表現 (assertion)」の共通した3次元で構成されていると考えられることから、乳幼児期から成人まで一貫して構成される3次元の枠組みが存在することが予測される。

生涯におよぶ発達において、乳幼児期の養育環境が子どもの発達に重要であるという観点から、養育者とのかかわりなど社会環境の質を測定する指標が数多く開発され、HOME (Home Observation for Measurement of the Environment)¹¹⁾や育児環境評価指標ICCE (Index of Child Care Environment)¹²⁾が代表的なものである。さらに子どもと養育者の社会能力のさまざまな側面を測定する「かかわり指標IRS (In-

teraction Rating Scale)¹³⁾は、子どもと養育者の相互作用を日常的なかかわり場面の設定で簡単に評価でき、専門職が気になる子どもと養育者の早期発見、早期支援に活用できるよう作成されている。

成人の社会能力を評価する指標にはSSI (Social Skills Inventory)¹⁰⁾、日本語版SSI¹⁴⁾、ENDCOREs¹⁵⁾、ABCL (Adult Behavior Checklist for Ages 18-59)¹⁶⁾、Kiss-18³⁾などがある。またコミュニケーション能力を測定する尺度としてAQ (Autism-Spectrum Quotient)¹⁷⁾、日本語版AQ¹⁸⁾などがあるが、これらの指標は自己評価を行うものであり、実践場面で社会能力を行動観察評価によって総合的、客観的に評価できる指標はほとんど見当たらない。

そこで筆者らの研究チームは成人用の社会能力を測定する指標として「かかわり指標 (成人用) IRSA (Interaction Rating Scale Advanced) 研究版」¹⁹⁾を開発した。これは対人場面において発揮される成人の社会能力を多面的にとらえ、構成要素とした行動観察指標である。この指標は表現力、自己主張、解読力、他者受容、関係調整、自己統制の6領域の印象評定と、92項目の行動生起について行動評価を行うものである。指標の開発には既存のさまざまな成人用社会性測定尺度を参考に、複数の専門職および研究者との議論を行い、予備調査において専門職が評価しやすい項目となるよう改訂を加え作成した。この「IRSA研究版」を用いた高校生17例に対する行動観察評価と教員が実施した臨床評定との妥当性の検証では正の相関 ($r = 0.65$) がみられ²⁰⁾、内的整合性を示す各領域のクロンバックの α 係数は0.8~0.9であった。

本研究ではこの「IRSA研究版」を基に作成した、成人の社会能力をより簡便に測定できる「IRSA実践版」の臨床的妥当性を、行動観察評価と臨床評定との関連から検討することを目的とする。

Ⅱ 方 法

(1) 研究対象と方法

18歳以上を条件として参加者の募集を行い、希望者を対象に実験課題を実施した。場所は（独）自然科学機構生理学研究所内の実験室を使用した。

実験課題は、日常的なかかわり場面において発揮される成人の社会能力の特徴を把握するため、対戦型ゲームのスティッキーを用いて設定した。スティッキーゲームは、各色9本ずつある3色のスティック計27本をリングに通して立て、それらが倒れるまで交互にスティックを抜き勝敗を競うゲームである。2名1組で課題を行い、組となる2名は実験室入室時に初対面となるよう設定した。実験室入室後に課題の説明と倫理的配慮の手続きを行い、課題と計測を実施した。約5分間の課題実施中ビデオカメラを用いて映像データの記録を行った。入室から退室までの所要時間は10～20分である。

(2) 調査内容

実験課題実施中に記録した映像データを用い、研究者2名による客観的な行動解析と専門職1名による臨床評価を行った。

行動観察評価には「IRSA実践版」を用いた。「IRSA実践版」は「IRSA研究版」を基に、複数の専門職と研究者による改善を加えながら作成し、「協調」「自己制御」「自己表現」の3領域と39の社会能力評価項目群で構成されている行動観察評価指標である。評価方法は各項目の行動生起について「あり」を1点、「なし」を0点として得点化し、各領域の得点を合計したものを領域得点とし、すべての項目得点を合計したものを総合得点とした。また評価者には詳細な評価方法を明記した評価マニュアルを配布し、予備的調査において評価者間の一致率が90%以上を示すことを確認した。

つぎに「IRSA実践版」の行動観察項目の臨床的妥当性を検討するため、専門職による臨床評価を行った。評価項目は「協調」「自己制

御」「自己表現」の3領域と「総合」評価で構成されている。評価基準は「協調」では他者に対して協調的、共感的な行動をとること、「自己制御」では自分の感情や行動をコントロールできること、「自己表現」では自分の意見や意志を明確に表現できること、「総合」評価では3領域を構成する要素の特徴を加味し、相手との調和が取れていることとした。評価は各項目でリッカートスケール法を用いた5段階評価を行い得点化した。

(3) 分析方法

客観的な行動解析と専門職による臨床評価の関連を検討するため、「IRSA実践版」の領域および総合得点と、臨床評価の領域および総合評価得点に対してSpearmanの相関分析を実施した。分析にはPC版SAS統計パッケージVer.9.1を用いた。

(4) 倫理的配慮

本研究は実験観察記録による調査である。実験観察記録開始前には調査の目的、個人情報との管理と匿名化などの配慮がされること、調査への協力は個人の自由であり調査に協力しなくても個人の不利益にはつながらないこと、同意書にサインした後でも不利益を受けず随時撤回できることを口頭で説明し、これらを明記した同意書を用意した。この同意書にサインを行うことで同意を得られたものとした。得られたデータは研究として使用し、それらのデータの公表や報告にあたっては、所属や個人の名前が特定できないよう十分に配慮した。

個人情報保護、倫理上の観点から対象者に危険または不利益が生じないように、回収後の質問票と映像データはすべて鍵付き棚に保管し、厳重な管理下で適正に取り扱った。

Ⅲ 結 果

対象者は男性22名、女性21名、年齢分布は男性で平均23.7歳、範囲は18～37歳、女性で平均24.2歳、範囲は18～48歳であった。

表1 IRSA実践版の項目別評価

		(単位 人, () 内%)	
		行動評価 (n = 43)	
		なし	あり
1. 協調			
1	相手が目と目でコンタクトをとろうとした時、見返す	3 (7.0)	40 (93.0)
2	相手と目を合わせて意思や態度を共有する	- (-)	43 (100.0)
3	相手の笑いやほほえみに対応して、笑いやほほえみがみられる	- (-)	43 (100.0)
4	相手の発言やしぐさに対して、うなずくあるいはほほえむ	- (-)	43 (100.0)
5	相手に合わせて動く	5 (11.6)	38 (88.4)
6	感情の共有がみられる	1 (2.3)	42 (97.7)
7	相手の成功や失敗に対して動作により反応する	2 (4.7)	41 (95.3)
8	相手の努力、行動、成功などをほめる	15 (34.9)	28 (65.1)
9	相手と同時に発話しない	1 (2.3)	42 (97.7)
10	相手が何か言おうとしたら、自分が話すのをやめて待つ	1 (2.3)	42 (97.7)
11	相手に挨拶をする	33 (76.7)	10 (23.3)
12	相手に謝罪の言葉を言う	41 (95.3)	2 (4.7)
13	相手の発言に対応しない発言、表情または動きがある	36 (83.7)	7 (16.3)
14	相手の態度や非言語的な行動に対応しない発言、表情または動きがある	30 (69.8)	13 (30.2)
15	場の雰囲気明るくするような言動をとる	10 (23.3)	33 (76.7)
16	相手に配慮をする言動がみられる (研究室で確認作業)	3 (7.0)	40 (93.0)
17	相手との関係が円滑になる適切な対処を行う	5 (11.6)	38 (88.4)
2. 自己制御			
18	不自然な目の動きがない	9 (20.9)	34 (79.1)
19	不自然な体の動きがない	3 (7.0)	40 (93.0)
20	不自然な発話がない	1 (2.3)	42 (97.7)
21	常に緊張をしていない	9 (20.9)	34 (79.1)
22	感情的な態度で相手に応じない	2 (4.7)	41 (95.3)
23	相手やものに対して乱暴な態度をとらない	- (-)	43 (100.0)
24	相手を不快にさせる態度をとらない	2 (4.7)	41 (95.3)
25	自分の思うようにいかなくても、気持ちの切り替えをし、立ち直る	- (-)	43 (100.0)
26	逸脱した行為がみられない	- (-)	43 (100.0)
27	過敏な反応がない	- (-)	43 (100.0)
28	こだわり、執着がない	1 (2.3)	42 (97.7)
3. 自己表現			
29	共感を求めて相手に視線を向ける	5 (11.6)	38 (88.4)
30	課題中に自然な微笑み、笑顔がみられる	- (-)	43 (100.0)
31	相手からの応答を主体的にひきだそうとする	9 (20.9)	34 (79.1)
32	自分の気持ちを表情やしぐさによって表現する	- (-)	43 (100.0)
33	自分の気持ちを表情やしぐさでうまく表現する	10 (23.3)	33 (76.7)
34	相手と異なる意見や立場を表示する	27 (62.8)	16 (37.2)
35	相手と異なる意見や立場をうまく表示する	30 (69.8)	13 (30.2)
36	自分の考えを表す発言がある	- (-)	43 (100.0)
37	自分の考えを言葉で相手にうまく伝える	7 (16.3)	36 (83.7)
38	自らのご意見を提案し決定する発言、しぐさがある	22 (51.2)	21 (48.8)
39	自分の主張を論理的に筋道を立てて説明する	29 (67.4)	14 (32.6)

注 項目13, 14は「なし」を1点, 「あり」を0点とする

表2 IRSA実践版 領域得点

	N	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値
総合評価	43	31.9	4.4	33	19	38
協調	43	13.7	2.0	14	8	16
自己制御	43	10.4	1.2	11	6	11
自己表現	43	7.8	2.2	8	4	11

「IRSA実践版」の項目別評価は表1に示すとおりである。39項目のうち行動生起に特徴がみられた項目は29項目、対象者すべてに共通した行動生起項目は10項目であった。

「IRSA実践版」の領域および総合得点は「総合評価」得点で平均値は31.9 (標準偏差, 以下, SD4.4), 中央値33, 最小値19, 最大値は38で

表3 臨床評定結果

	N	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値
総合評価	43	3.7	0.7	4	2	5
協調	43	3.8	0.7	4	2	5
自己制御	43	3.9	0.7	4	2	5
自己表現	43	3.6	0.8	4	2	5

あった (表2)。

臨床評定の結果は「総合評価」で平均値は3.7 (SD0.7), 中央値4, 最小値2, 最大値は5であった (表3)。

「IRSA実践版」の領域および総合得点と臨床評定の領域および総合評価との相関係数は「協調」($r = 0.62$)「自己制御」($r = 0.61$)「自己

表現」($r = 0.59$)「総合評価」($r = 0.72$)であり、すべてに有意($p < 0.001$)な正の関連がみられた(表4)。

Ⅳ 考 察

研究用に開発した「IRSA研究版」は社会性の3因子構造(協調性因子、自己制御因子、自己表現因子)の枠組みの下位領域として「協調性因子」を〈読解力領域〉〈他者受容領域〉〈関係調整領域〉、「自己制御因子」を〈自己統制領域〉、「自己表現因子」を〈表現力領域〉〈自己主張領域〉として設定している。

Greshamら⁵⁾は「自己制御(self-control)」を葛藤場面で適切に対応できること、交代や譲歩ができるなど自分の欲求や要求を抑えたうえで振る舞う行動、「協調(cooperation)」を他者に対して協調的、共感的な行動、「自己表現(assertion)」は自己紹介ができる、会話を引っ張る、要求をきちんと述べるなど、自分自身や自分の意思を明確に説明し表現する行動を表わしていると報告している。本研究の結果で示した「IRSA実践版」3領域においても、第1因子は「協調性」、第2因子は「自己制御」、第3因子は「自己表現」をそれぞれ示していると解釈される。実践用に開発した「IRSA実践版」は、専門家による臨床評定との相関がみられ、「協調性」「自己制御」「自己表現」の3領域および「総合」評価の関連が確認された。

「IRSA研究版」は、先行研究において16～17歳の社会性を測ることのできる尺度であることが確認されている¹⁹⁾。本研究では、「IRSA実践版」を18歳以上の成人の社会性を測る尺度として用いる可能性が確認された。このことから3因子構造の枠組みを維持しながら、より簡便に実践で成人の社会能力を測定できる可能性を示唆しているといえる。

IRSA実践版の3領域との関連では、青年の社会的自己制御を研究した原田ら²¹⁾は、反社会的行動を抑止するためには自己制御能力を身につけることが必要不可欠であるとし、さらに自己制御能力と自己を主張する能力の双方を身に

表4 IRSA領域得点と臨床評定の相関係数

	IRSA領域得点			
	総合評価	協調	自己制御	自己表現
臨床評定				
総合評価	0.72***	—	—	—
協調	—	0.62***	—	—
自己制御	—	—	0.61***	—
自己表現	—	—	—	0.59***

注 *** $p < 0.001$, Spearman

つけることの重要性を報告している。また幼児期から成人期における協調性と気質との関連を検討した登張²²⁾は、協調性が社会的絆の形成と維持に関連する気質と関係があることを報告している。このことから成人の社会能力の特徴を簡便に測定できる「IRSA実践版」を実践の場で活用することにより、社会能力の向上および発揮に困難のある成人に対する支援の一助となることが考えられる。

本研究は参加希望の得られた43名のデータに基づき検討したものであるため、本研究の参加者のサンプルバイアスを充分に加味したうえで、対象を拡大した本指標の信頼性妥当性検証が求められる。さらには「IRSA実践版」を用いた成人の社会能力の特徴と関連要因を分析することで、より精度の高い支援の一助となることが期待される。

謝辞

本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金「追跡研究を用いた貧困・虐待・発達障害等への「根拠」に基づく早期支援方法の解明(課題番号23330174)」, 脳科学研究戦略推進プログラム「社会的行動を支える脳基盤の計測・支援技術の開発」の成果である。

文 献

- 1) 内閣府. 国民生活白書平成19年版. 内閣府, 編. 東京: 時事新報社 2007: 1-8.
- 2) 繁多進. 社会性の発達とは. 繁多進, 青柳肇, 田島信元, 編. 社会性の発達心理学. 東京: 福村出版 1991: 9-16.
- 3) 菊池彰夫. 思いやりを科学する. 大阪: 川島書房

- 1988 : 1-212.
- 4) 相川充. 社会的スキルという概念. 相川充, 津村俊充, 編. 社会的スキルと対人関係. 東京: 誠信書房, 1996 : 3-21.
- 5) Gresham FM, Elliot SN. Social skills rating system-Secondary. Circle Pines, Minnesota : American Guidance Service 1990 : 1-223.
- 6) Caldarella P, Merrell KW. Common dimensions of social skills of children and adolescents : A taxonomy of positive behaviors. School Psychology Review 1997 : 26 : 264-78.
- 7) Elkskin LK, Elikskin N. Teaching social skills to students with learning and behavior problems. Intervention in School & Clinic 1990 : 33(3) : 131-41.
- 8) Kolb SM, Hanley-Maxwell C. Critical social skills for adolescents with high incidence disabilities : parental perspectives. Exceptional Children 2003 : 69(2) : 163.
- 9) 高橋雄介, 岡田謙介, 星野崇宏, 他. 就学前児の社会的スキル: コホート研究による因子構造の安定と予測妥当性の検討. 教育心理学研究 2008 : 56(1) : 81-92.
- 10) Riggio ER. Assessment of Basic Social Skills. Journal of Personality and Social Psychology 1986 : 51(3) : 649-60.
- 11) Caldwell BM, Bradley RH. Home observation for Measurement of the environment. Little Rock : Center for Research on Teaching and Learning. University of Arkansas 2001 : 1-164.
- 12) 安梅勅江. 気になる子どもの早期発見・早期支援 - 「かかわり指標」を活用した根拠に基づく子育て・子育て支援に向けて -. 東京: 日本小児医事出版社. 2009 : 1-60.
- 13) Anne T, Shinohara R, Sugisawa Y, et al. Gender difference of children's social skills and parenting using Interaction Rating Scale (IRS). Procedia Social and Behavioural Sciences. 2010 : 2 : 260-8.
- 14) 榎野潤. 社会的技能研究の統合的アプローチ (I) - SSIの信頼性と妥当性の検討 -. 関西大学大学院「人間科学」1988 : 31 : 1-16.
- 15) 藤本学, 大坊郁夫. コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の取り組み. パーソナリティ研究 2007 : 15 : 347-61.
- 16) Achenbach TM, Rescorla LA. Manual for the ASEBA adult forms & profiles. Burlington, Vermont : University of Vermont, Research Center for Children, Youth, and Families. 2003 : 1-216.
- 17) Baron-Cohen S, Wheelwright S, Skinner R, et al. The autism-spectrum quotient (AQ) : Evidence from Asperger Syndrome/high-functioning autism. males and females, scientists and mathematicians 2001 : 31 : 5-17.
- 18) 若林昭雄, 東條吉邦, Baron-Cohen S, et al. 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化. 心理学研究 2004 : 75(1) : 78-84.
- 19) Anne T, Watanabe T, Tokutake K, et al. A pilot study of social competence assessment using Interaction Rating Scale Advanced (IRSA). ISRN Pediatrics, 2011 doi : 10.5402/2011/272913.
- 20) 安梅勅江. 生涯発達をみすえた社会能力の評価と活用にむけて. Child Science 2011 : 7 : 5-9.
- 21) 原田知佳, 吉澤寛之, 吉田俊和. 自己制御が社会的迷惑行為および逸脱行為に及ぼす影響 - 気質レベルと能力レベルからの検討 -. 社会心理学研究 2009 : 48(2) : 122-36.
- 22) 登張真穂. 協調性とその起源 - assertionとcooperativenessの概念を用いた検討. パーソナリティ研究 2010 : 19(1) : 46-58.